

歩きながら 地域の 自然環境や 歴史に 触れてみよう

経済学部教授
泉 留維



いずみ るい

1974年生まれ、東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程修了。2004年専修大学経済学部入職。専門は、エコロジー経済学。最近は、フットパスやトレイルと呼ばれる小径に注目し、各地を歩きながら研究を進めている。



環境を「保護」ということ

みなさんの家の近くに、コナラなどの落葉広葉樹林を中心とした緑豊かな里山があるとします。ここの景観や自然環境を守るためにどうしたら良いと思いますか。人が立ち入って荒らさないように周りを柵で囲む、もしくはどんどん人に立ち入ってもらい利用してもらおう、どちらでしょうか。

答えは、後者となります。もちろん無条件で利用を促しては問題となりますが、一度でも人の手が入った自然は聖域のようにかたくなに保護すると、ササやタケが侵入し、見た目も悪くなり、生態系も単純化していきます。ただ、一昔前までは、毎日の炊事や冬の暖房用の燃料、そして水田など肥料を採取するなどの利用が盛んに行われていましたが、それらはガスや化学肥料に取って代わられた今、里山にはどのような利用方法があるのでしょうか。

里山のような自然環境の保全において、これまで資源採取などの過剰利用をいかに防ぐかという視点で研究が進められてきましたが、近年、逆に過少利用をいかに防ぐかという視点の研究も増えてきています。資源採取ではない新たな利用として、里山のような人里に近い自然環境は、環境教育やレクリエーション目的

での利用が希望されるようになっていきます。例えば、人々がウォーキングする道、フットパスを設置するようなレクリエーション目的としての利用を挙げることで、自然環境を楽しむウォーカーが増えることで、周辺を下刈りするなどの整備が進められ、また自然に触れる機会が増えることで環境保全への関心を持つ人々が増えることも想定されます。



道東のフットパス

私のゼミでは、2010年から毎年、北海道根室市で夏合宿を行い、地元の酪農家グループ、AB-MOBITと協働して、既存のフットパスの整備や新規のフットパスのコースの設定をしています。

AB-MOBITは、酪農の暮らしや農村景観の魅力を都市の消費者と共有し、酪農体験などを通じて交流を深め、地域活性化につなげることを目的とした団体で、2003年に根室フットパスを設置しました。根室フットパスには、開始当初、^{あつとこ}厚床パス、^{ほつたうし}初田牛パス、^{べつと}別当賀パスの3コース(計42.5km)が設置され、そこを「歩く」ことで、明治期の開拓や昭和期のパイロットファームの歴史、当地の生活の成り立ちを知り、北海道の魅力を再発見することができるようになっていきます。「車



↑明郷バスの築堤になっている路床で草刈り



↑別当賀バスの旧馬場牧場のサイロを丘から望む

を降りてフットパスを歩く」ことで、北海道における人間と自然の関わりを見つめ直すという、新たなつながりを提示しようというものでもあります。

ゼミでは、最初の3年間は別当賀パスの整備に当たりました。別当賀パスは、他の2コースと比べると、もっとも根釧台地の原生的風景を色濃く残しており、コース周辺は映画「許されざる者」(2013年)やテレビドラマ「南極大陸」(2011年)の撮影場所ともなっています。JR根室本線の別当賀駅から、左右に放牧地がひろがる公道を通り抜けた後、国有林、日本野鳥の会のタンチョウ保護区の中を通り、最後はAB-MOBITのメンバーの採草地に至るコースです。この地で酪農が始まったのは昭和初期であり、当時のレンガとブロックでできたサイロが現存しています。コースの末端まで歩くと、太平洋が一面に見渡せる断崖絶壁に出て、運が良ければ海辺に半ば野生化した道産子が走る光景も見ることができます。ゼミとして関わったときにはすでにコースが設定されており、キッシングゲート(人のみを通し家畜の通過を妨げる門)や道標の設置、野鳥観察小屋の建設などを行いました。



フットパスを作ってみよう！

別当賀パスの整備事業での経験を踏まえて、2015年から新コースの設置事業を始めました。最終目標は、隣町の別海町にある旧標津線フットパスと厚床パスを接続、そして別当賀パスと根室市落石にある落石シーサイドウェイを接続して、計6コースからなる総延長70km近いロングトレイル(長距離フットパス)を完成させることです。2015年と2016年に取り組んだのが旧標津線フットパスと厚床パスを接続する新コース作りです。

新コース設定でポイントとなったのが、JR厚床駅から始まる旧標津線(1933年開通、1989年廃線)です。別海町の旧標津線フットパスは別海町と根室市の境を流れている風蓮川の手前まで通じています。その風蓮川を越えないと、お互いが接続できないのですが、

厚床パスが通っている伊藤牧場の北側に古川牧場があり、さらにその北側となると、土地改良がなされず、見渡す限り泥炭湿地帯となっています。今でも大雨が降ると、風蓮川から水があふれ、湖のようになります。牧草地や採草地を通り抜けるようなルートは物理的に設定できず、自動車道路(国道243号)にルートを設定しないのなら、標津線の廃線路跡にするしかありませんでした。

廃線になった後、線路は取り除かれましたが、路盤跡や鉄橋等はほぼそのまま残されたのは幸運でした。新コースは旧標津線の路盤跡を歩き、鉄道車窓から見るように根釧台地の原生的風景を楽しみつつ、昭和初期に造成された築堤や鉄橋などを見て先人たちの苦闘を偲ぶものとなっています。整備に当たっては、所有権の確認や許可を得る作業はAB-MOBITが行い、泉ゼミは草刈りや灌木の伐採、道標のデザイン、ルートマップの基本デザインなどを行いました。資金面では産官学連携の組織である根室産業クラスター創造研究会などから協力を得て、また鉄橋の架設設置のような専門的な作業は地元の建設会社に社会貢献活動として行ってもらいました。2年をかけて整備を終え、「明郷パス」と名付けられた新コース(4.3km)は2016年9月に地元住民に対してお披露目され、その後、正式に開通しています。



これからの取り組み

2017年からは、次の新コース、別当賀パスと落石シーサイドウェイを接続するルートの整備が始まりました。明郷パスとは違い、廃線路跡のようなルートにふさわしい明確な空間はなく、見渡す限りひろがる起伏に富んだ原野を、どのように意味づけてルート設定するかがポイントとなっています。地盤所有者や地元住民などとの利害調整をしながら、学生と酪農家グループと協働で取り組みを進め、歩きながら地域の自然環境や歴史に触れることができる機会をさらに作り出していきたいと思っています。